報道と人権

―人権週間記念講演会から―

今年度も人権週間記念講演会が12月8日（月）文化会館大ホールで行われました。

講演に先立って、市内の小中学生四名の皆さん自身による人権作文の朗読が行われました。いずれも自分の体験をもとにして、友達や家族の絆の大切さや、いじめのおかしさなどを訴え、参加者の心に深い感銘を与えました。

▲人権作文を朗読した皆さん

その後「報道と人権」～松本サリン事件からの教訓～と題して河野義行さんにお話をしていただきました。

ご承知のように、河野義行さんはサリンの被害者でありながら事件の被疑者として調べられ、犯人扱いで大々的に報道されました。そして興味本位や悪意に満ちたマスコミや市民感情が洪水のように本人や家族に押し寄せました。

その後、河野さんの無実は明らかになりましたが、サリンの被害のため意識不明のまま14年もの間闘病生活を強いられた妻澄子さんが手厚い看病の甲斐もなく、昨年8月に亡くなっておられます。

講演は、事件発生時の状況や、その後の取り調べの様子、あるいは当時のマスコミがどのように自分や家族に向かってきたのか、また世論がどんな反応をしたのかなどを、経過を追ってわかりやすく話していただきました。

捜査当局とマスコミが一緒になって世論を作り上げていくこと、その世論を利用する一方で、世論に押されて動かなければならなくなる当局とマスコミの姿も具体的な出来事を通して話されました。

また冤罪が、河野さん一家と、一家につながる人たちを深く傷つけるだけでなく　無実が明らかになった時、河野さんを非難していた人の心も傷つけることになり、その人たちも報道の被害者だと河野さんは言われます。

そして、想像を超える重圧の中で頑張れたのは家族の絆、特に意識不明のままの妻澄子さんの存在だったと話されました。《命があれば、生きていてくれるだけで大きな力を与えてもらえる》大きなことばです。

▲講師の河野義行さん

さらに、困難から逃げない、何を言われてもされても、正面から対応する、少しでも《心の位置を上げる》ことが大切だとも話されました。

穏やかに、しかし確信を持って訴えられることばの一つひとつが心の中に深く刻まれるとともに、安易に報道を信じ、偏見に陥りがちになる私たち自身を問われる講演となりました。

アンケートの一部を紹介します。

・四名の人権作文発表はいずれも胸を打たれるもので、感動しました。

・マスコミや警察によって冤罪が作られ、人権が侵害されるという現実にただ驚くばかりです。

・人の言うことを鵜呑みにする怖さを感じました。職場でのいじめを今年受け、つらい思いもしましたが、今日の話を聞いて世間につぶされることなく命を大切にしたいと改めて思いました。

・生きているだけで価値のある命の大切さに気づかされました。

・マスコミ報道をそのまま信じるかどうかもですが、自分の言動がどのように人の人権侵害につながるかを考えさせられました。

・報道において重大な人権侵害が行われたり、二次被害もあることなど、思い込みや偏見の恐ろしさを改めて知りました。

・私もあの事件の報道で、この人が犯人かと漠然と思った記憶があります。マスコミの力、世間とは恐ろしいものだと思う。何が真実なのか、自分の目をしっかり開いて見なければならない。

・「自分の心の位置を上げる、報道の二次被害、世論の力、妻の意識不明―大きな力になった、命の大切さ」こんなすごい人権講演は初めての経験でした。